宗岡二中だより　12月号

令和5年12月1日

自ら学び考える生徒
学校教育目標：心豊かな優しい生徒
明るく元気な生徒

気付く　判断する　行動する

～「『誰か』のこと　じゃない」感度～

校長　伊藤大輔

今年もあとひと月。師走（しわす）に入りました。校庭の木々もすっかり色づきました。冬の準備を始めています。朝夕もめっきり冷え込み、方々から「今日は寒いなあ。」と言う言葉が聞こえる季節が到来しました。月日が経つのは早いものです。

ここのところ、校外に出向いて会議等を行う機会が多くありました。電車・バス・徒歩で移動すると様々な状況に遭遇します。「スマホを見ながら歩いている人と目の不自由な人とが点字ブロック上でぶつかりそうになる」「急いでいるのか電車の扉が開くとすぐにホームや階段を走り他の人とぶつかりそうになる」「雨の日に傘の先が子供の眼にあたりそうになる。（バッグの持ち手と一緒に傘を横に持ったままエスカレーターに乗ったため）」…。当人は思いのほか「迷惑をかけているかも？」「他の人にケガをさせるかも？」ということに気付いていないかもしれません。自分の考えや都合を優先することが第一になってしまっているかもしれません。この「気付き」が無いまま繰り返していると、大きなトラブルや事故につながりかねません。

学校生活においても、似たような場面はありませんか？大きな事故に発展する一歩手前という場面です。そんなときは本人や周りにいる人が「こんなことをしたら相手がケガするかも？」「こんなことを言ったら相手が傷つくかも？」と「気付く」がどうかが明暗を分けます。「気付いた人」が、どう働きかけるか考え判断し、具体的な行動に移したことによって、事態の悪化（＝危機）は回避されるのです。

国は学校が授業等の計画・内容・取扱いを作る基準を定め、10年おきに改定します。学習指導要領といいます。特別の教科道徳の内容に関して次の記述があります。「中学校ではまず、自己の気高さに気付かせ、何が正しく、何が誤りであるかを自ら判断して望ましい行動をとれるようにすることが大切である。」と。気高さとは人間の心の美しさを表す言葉です。生徒に正しく行動しようとする心の動きを自覚させることが大切だと示しているのです。

前号の話題にも関わるのですが、人はもともと弱く脆い存在です。だから人は他の人と関係をもち支え合い、生存するために「社会」を築いたのです。関係が深まるほど「自分のことをわかって欲しい」「相手のことをもっとわかりたい」という感情が生まれます。他の人と関わる限り生じる自然な感情と言えましょう。そして分かり合う気持ちがあるから人と人は上手に関係を紡ぐのです。よく「親切に接しましょう」とか「思いやりを大切に」と言われます。こうした徳目は理念だけが独り歩きしても、そのとおりにはなりません。実践しないと実現しないのです。そして実践の起点は「気付く力」にあると私は考えます。

ところで、人が最も効果的に学ぶ瞬間は、皆さんはいつだと考えますか？私は「ああ、そうだったのか」と気付く瞬間だと思います。とくに自分の力で気付いたときは納得感があり、記憶にもしっかり残る気がします。気付きにもいろいろありますが、自らの成長に繋がる気付きがあると私は信じています。それは、自分の知らなかった自分に気付いたときです。案外、人は自分のやっていること、考えていることを理解できていません。自分に対して関心を向け、自分が「わかっていること」そして「わかっていないこと」を自覚することは成長への原動力ではないでしょうか。返却されたテストの得点や通知表に記載された評価・評定は、自分の成長と伸びしろに気付く格好の拠り所なのです。

さて12月４日から人権週間が始まります。これは、国際連合で1948年（昭和23年）12月10日の第3回総会において、世界人権宣言が採択されたことに由来します。世界人権宣言は、人権保障の目標や基準を初めて国際的にうたった画期的なものです。採択日である12月10日は、「人権デー」と定められています。法務省の人権擁護機関では、人権デーを最終日とする1週間（12月４日から12月10日）を「人権週間」と定め、全国的に人権啓発活動を特に強化して行っています。75回目を迎える本年度の啓発活動重点目標は「『誰か』のこと　じゃない。」です。学習や生活にも当てはまります。誰かのことではなく自分のことです。人と関わる中で気づき、判断し、行動する。冬休みを前に、よりよき行動に結び付く自分の在り方に目を向けましょう。